様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１８日現在

機関番号：２３９０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５２０１９７
研究課題名（和文）　心敬の文学作品における創造と新撰菟玖波文学圏への影響についての総合的研究
研究課題名（英文）　A Synthetical Research on Shinkei’s Creation in His Literary Works and Effect on The Sphere of Shinsen-Tsukuba-Literatures
研究代表者
伊藤　伸江（ITO NOBUE）
愛知県立大学・日本文化学部・教授
研究者番号：30259311

研究成果の概要（和文）：
この研究においては、心敬の表現分析に必須と思われる、彼が法華宗僧、畠山氏、細川氏らと張行した在京時の連歌百韻の注釈を行い、作品の詳細な検討を行なった。その結果、関東下向以前の心敬の句風の特徴がわかり、心敬句と正徹の和歌表現の密接な関わりが検証でき、心敬句の本歌取手法を具体的に抽出できた。また、心敬が宗祇にあてた『所々返答』第三状の引用句の出典を明らかにしえ、初学期の宗祇の万葉集詞への強い関心を明らかにできた。

研究成果の概要（英文）：
In this research, we first carry out an essential work to analyze Shinkei's techniques for expressing poems. That is, we interpret and examine the century of rengas (linked poems) in detail, which was made by Shinkei together with the Hokke sect Buddhists, the Hatakeyamas, and the Hosokawas.
We consequently characterize the spirit of his verses before visiting Kanto area, find a deep relation between expressions of Shinkei's verses and Shotetsu's poems, and extract concrete methods for Honka-dori of Shinkei.
Moreover, we identify the source of the quotation in the third letter of Tokoro-dokoro-hentou, which was sent from Shinkei to Sogi, and then we clarify that Shogi was strongly interested in Manyo-shu-words when he was a beginner.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：
科研費の分科・細目：文学、日本文学
キーワード：連歌,・和歌・心敬・正徹・連歌論・百韻・法華宗・宗祇

１．研究開始当初の背景

本研究においてその作品を考察対象とした心敬(1406～1475)は、高い文学的到達点を示す幅広い創作活動によって、日本中世文化

史に特筆されるべき存在である。とりわけ、仏教思想と歌論の融合によりあみだした独特かつ難解な連歌論は、中世思想の最高峰と目され、鮮やかな感覚が冴える連歌の付合は、宗祇に学ばれ『新撰菟玖波集』をはじめとする後代の文学に多大な影響を与えている。しかし、その思想の難解さゆえに、連歌論研究が充分になされているとは言い難く、また連歌作品への積極的な接近も未だ少なかった。

心敬の文学作品が、応仁・文明期という日本中世文学の重要な転換期において大きな力を及ぼしていることは明白であり、そうした問題意識に基づいて先学の研究が重ねられてきたが、研究開始当初は、心敬研究に主にとりくんでいる連歌研究者はほぼいない(国文学研究資料館の国文学論文データベースによれば、心敬の文学作品に関する論文は2007年に1件、2006年に2件である。)という、研究の空白が存している状況であった。

２．研究の目的

研究が活発に行なわれているとはいいがたい状況にある、心敬の文学作品(連歌、連歌論、和歌)に関して、心敬の家集注釈を終え、歌論・連歌論研究に継続してとりくんでいる伊藤と、『新撰菟玖波集』の全釈を編者として完成させた奥田が、それぞれの視点からの問題意識を提供し、心敬の文学的な創造・達成の状況を明らかにし、新撰菟玖波文学圏への影響の度合をも分析することを目的とした。

また、心敬の研究の一つの側面として重要な、心敬と宗祇との影響関係について、著書『宗祇』(平成10・吉川弘文館)を著した奥田が、今回、伊藤と共に宗祇と心敬が同座する百韻に関して詳細に注釈し検討することで、心敬の句、また連歌論の宗祇への影響に留意し、両者の関係に心敬の側からの新見を見いだすことも目標とした。

３．研究の方法

研究対象である連歌作者心敬が宗匠として参加する百韻を読解し、注釈作業を行なうことで、心敬が宗匠としていかに百韻を張行していくかを考察し、かつ心敬の句が百韻の中でいかに働き影響力を及ぼしているかを考究した。従来の研究でなされていた手法は、連歌論書を主な研究対象として、その中から連歌作品、作家の特徴などを論ずる形が大勢を占めていた。しかし、この研究においては、研究の第一段階で、まず実作にたちかえり、他に類のない詳細な注釈の作成をなし、そこから句における問題点を発見する着実な手法をとることに基盤を置いた。

その上で、連衆と心敬の相互影響関係が投影されて制作に至る第一次資料をつぶさに検討し、選択され撰集の形となってしまった付合の検討のみではわからない連歌の現実の制作の場の姿を明らかにする形で進めていった。

さらに、張行の場に参加する連衆の出自を検討し、心敬の連歌製作がいかなる文化圏でなされ、どのような階層の人々に支えられていたかも考察するため、周辺資料の調査、研究にも重点を置いた。

４．研究成果

平成21年度から23年度にわたる研究計画期間において、心敬の表現分析に必須と思われる、在京時の連歌百韻を選び、百韻全体の検討を詳細に行った。その結果、『落葉百韻』・『寛正六年正月十六日何人百韻』の二つの百韻の初の訳注を完成することができた。

さらに、法華宗の両本山寺院である本能寺、本興寺のご好意で、『落葉百韻』その他、法華宗寺院に現存する連歌作品等を調査することができた。

まず、本能寺で行なわれた『落葉百韻』の調査、考察により、本能寺日与上人の主導下、法華宗徒や、畠山氏被官などの地方有力武士たちがなした法華宗寺院での文芸活動の実態を把握し、関東下向以前の心敬の交友関係、彼の属した文化圏の様相が具体的に解明できた。関連する本興寺での調査も、法華宗寺院と連歌との関係をさらに深く調査して行く契機となることが予見された。

さらに、『落葉百韻』の百韻内の各句の検討によって、心敬の句風の特徴と正徹の和歌表現との密接な関わり等を検証した。すなわち、心敬は、和歌の師正徹の冷泉派歌学を信奉し、正徹和歌のモチーフを即座に自歌、自句に取り入れるのみならず、作句理論も、冷泉派歌学を核にして作りあげている。さらに、連歌論での発言から本歌取という手法に否定的であったことがわかっている心敬の句を検討することで、「面影」を句に投影する本歌取ならばよしとした、その心敬句の本歌取手法を具体的に浮かび上がらせることができた。

加えて、心敬と宗祇の同座する『寛正六年正月十六日何人百韻』の注釈により、心敬の宗祇にあてた連歌指導書『所々返答』第三状に用いられた付合は、この百韻内の付合であったことがわかった。これによって、出典があきらかな付合の少ない『所々返答』第三状ではあるが、心敬は関東下向直前に同座した百韻から句を選び、具体的に宗祇に句作りについて教示したことが検証できた。

さらに、注釈によって、宗祇が、『寛正六年正月十六日何人百韻』中で万葉歌の詞を意図的に多く使用したことも新たに明らかになった。宗祇と万葉集との関係は、現在の連歌研究においては、解明が進んでいない分野であり、ここに初学期の宗祇句の新しい特徴

を抽出しえた。同時に、専順の弟子として参加した中堅どころの連歌師宗祇が、その自由な立ち位置を利用して、この百韻をいわば自句の研鑽の場ととらえ、独自に積極的な出句の練習をなしていたことが判明した。これは、百韻という複数の人の創作である文芸の持つ一特徴を表わすものであり、それを示し得ることができた。

その他、百韻の進行の様相を当時使われていた式目と照らしあわせることにより、心敬が宗匠として、水辺の体用の語句の使用をよりゆるやかにしていったことがわかり、それは『私用抄』などの彼の論書の記述を裏づけるものであることも判明した。連歌に使用される語句は、式目の規則に載せきれないものも多くあるが、そうしたルールのはざまでの裁定、もしくはルールを現場で変更する裁定を宗匠心敬がなしていたことが、寛正年間の連歌の特質に決定づけ、以後の連歌の流れに影響していったわけである。

以上のように、百韻全体の詳細な注釈・考察から入るという、当研究計画の独自の姿勢は、寄合書、連歌論書のみからではわからない、作風についての問題点の掘り起こしに非常に有効で、心敬のみならず宗祇の研究をも推進させることができた。今後は、心敬句の創造に中世歌学の享受が深く関与するという問題が大きくクローズアップされた(宗祇にも同様の問題が発見された)ことを受けて、研究計画を拡充した新しい基盤 C『中世歌学の享受から見た心敬の文学作品の創造と新撰菟玖波文学圏への影響に関する研究』で研究を進めていく。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 12 件）
①伊藤伸江、「心敬の詩学ー『寛正六年正月十六日何人百韻』の宗祇付句への批評からー」、国語と国文学、査読有、第八十九巻三号、2012、pp. 36-51
②伊藤伸江、「心敬と本歌取ー『落葉百韻』の「古畑山」の付句からー」、国語国文、査読有、第八十巻十一号、2012、pp. 1-17
③伊藤伸江、奥田勲、「本能寺蔵『落葉百韻』訳注(四)」、愛知県立大学日本文化学部論集、査読無、第三号、2012、pp. 39-60
④伊藤伸江、奥田勲、「本能寺蔵『落葉百韻』訳注(五)」、愛知県立大学大学院国際文化研究科論集、査読無、第十三号、2012、pp. 1-20
⑤伊藤伸江、奥田勲、「本能寺蔵『落葉百韻』訳注(六) 付. 考察及式目表」、愛知県立大学説林、査読無、第六十号、2012、pp. 9-26
⑥伊藤伸江、奥田勲、「大阪天満宮文庫蔵長松本『寛正六年正月十六日何人百韻』訳注(一)付 同百韻調査記録及び翻刻」、愛知県立大学大学院国際文化研究科論集、査読無、第十二号、2011、pp. 1-52
⑦伊藤伸江、奥田勲、「大阪天満宮文庫蔵長松本『寛正六年正月十六日何人百韻』訳注(二)」愛知県立大学説林、査読無、第五十九号、2011、pp. 1-31
⑧伊藤伸江、奥田勲、「本能寺蔵『落葉百韻』訳注(三) 付.『落葉百韻』調査記録」、愛知県立大学日本文化学部論集、査読無、第二号、2011、pp. 55-79
⑨奥田勲、「連歌輪講「寛正六年正月十六日何人百韻」を読む」、文学、査読有、隔月刊第 12 巻第 4 号、2011、pp. 2-44
⑩伊藤伸江、奥田勲、「本能寺蔵『落葉百韻』訳注(一) 付. 『落葉百韻』翻刻及び解説(『落葉百韻』について)」、愛知県立大学日本文化学部論集、査読無、第一号、2010、pp. 1-38
⑪伊藤伸江、奥田勲、「本能寺蔵『落葉百韻』訳注(二)」愛知県立大学大学院国際文化研究科論集、査読無、第十一号、2010、pp. 43-64
⑫伊藤伸江、「心敬における「夕べの鐘」」、愛知県立大学説林、査読無、第五十八号、2010、pp. 27-40

〔学会発表〕（計 1 件）
奥田勲、「データの構築・データの共有ー寺院資料調査と中世文学研究ー」（招待講演）、中世文学会春季大会、2010・5・29、於法政大学

〔図書〕（計 1 件）
伊藤伸江、笠間書院、『正徹と心敬』、2012、119P

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://ito-okuda-kaken.jimdo.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
伊藤　伸江（ITO NOBUE）
愛知県立大学・日本文化学部・教授
研究者番号：30259311

(2)研究分担者
奥田　勲（OKUDA ISAO）
聖心女子大学・文学部・名誉教授
研究者番号：90007948

(3)研究協力者
中尾　堯(NAKAO TAKASHI)
立正大学・文学部・名誉教授
研究者番号：70070521

小川　靖彦(OGAWA YASUHIKO)
青山学院大学・文学部・教授
研究者番号：10249922